

国連事務次長・軍縮担当上級代表



中満 泉

なかつ・いずみ 89年  
国連入りし、難民、人道支  
援や安全保障に従事。著書  
「危機の現場に立つ」。ニ  
ューヨーク市在住。57歳。

海外に暮らすようになって30年以上になる。自身は熊本に住んだことはないが、両親は熊本出身で親戚も多く、地震や台風、コロナの感染拡大ニュースにもニューヨークから心配になる。そういえば、今も我が家には古い肥後手毬が飾ってある。100歳を超える長寿であった私の祖父のお姉さんが、私が子供の頃に作ってくれたものだ。

4年ほど前に亡くなった父が書き残したメモを読むと、先祖は現在の菊池市重味にあった生味番所の役人や鹿本郡内の村長などをしていたら

維持活動（PKO）に携わったり、国連本部のPKO局で政策を担当したり、アジア中東部長として東ティモール、アフガニスタンからシリア・レバノン・イスラエルなど中東全域を主管したこともある。

考えるようになったのは、2017年に現在の軍縮担当事務次長・上級代表に就任してからだ。その年の7月に核兵器禁止条約が採択された時や、国連を代表して初めて広島と長崎での平和祈念式典に参列した際、被爆者の方々の体験談や核廃絶への言葉に触れて、小学生の時に訪れた被爆地の強烈な記憶を思い出した。

の国際社会共通の目標は、冷戦期のような大国間の競争関係が復活し、極東アジア、南アジアそして中東で複雑な緊張が続く中、私たちの安全保障に直結する問題だと痛感している。際限なき軍備拡張によって平和が保たれたことは歴史上ない。適切な自衛力は必要だが、軍縮・軍備管理はそもそも安全保障のツールであ

題や、行動規範をどう強化していくかについてのウェビナー（オンラインセミナー）を各国代表や専門家などを集めて主催している。人類は、陸・海・空に続いて宇宙とサイバー空間という新たな領域に活動を広げることが、その統治のための規範や国際法は、全く不十分だ。私が日本から海外へ飛び出したように、娘たちは宇宙に行くのが普通になるのかもしれない。だとすれば、平和な空間であってほしい。ガザやミャンマーやシリアの状況に無力感に打ちのめされながらも、そんなことを考えながら毎日努力を続けている。

## 人類の未来 熊本と考える

かったのはうれしかったが、日本人であることを意識して仕事をしたいとほとんどない。私の日本人らしさは旗を振るものではなく「オーラ」を出すもの、常に誠実に良い仕事をするので信頼され、その積み重ねが日本にもプラスになると思ってきた。今も変わらない私の信念だ。日本のことを仕事の上で直接的に

父も、終戦直前の8月9日に熊本から見た長崎のきのこ雲のことを、私の2人の娘たちに話していた。「言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救うために創設された国連の、総会決議第1号には核兵器とその他の大量破壊兵器の廃絶の目標が記されている。75年たった今も達成されないこ

り、外交努力と交渉での問題解決こそ私たちの安全には必要なのだ。さて、国連の軍縮の仕事は、核兵器以外にも、通常兵器・小型武器、そしてサイバー、人工知能（AI）、新しいミサイル技術やバイオ技術など、幅広い分野にわたる。この原稿を書いている時は、宇宙での軍拡を防ぎ、平和利用を促進するための課

人生の半ばもとうに過ぎたこの頃、私はどこから来てどこに行くのかを考えるようになった。そして、私たち人類はどこに行くのか。気候変動から地球を守り、持続的に繁栄を続けていけるのか。私たち皆の未来について、熊本の皆さんと考えていきたい。